

志賀直哉

ひとがき

このアルバムを作るにあたり、志賀家からは志賀直哉先生や其の家族の古い時代よりの写真
を沢山拝借した。又大竹新助氏とアルバム編集部、棚折久美子さんとは、非常な熱意で石巻
尾道や松江や、大山や奈良の写真を集めてくれた。資料は豊富になり過ぎ、編者の私は頁々で取捨選択に
うことが屢々であった。惜しい写真を一つ／＼割愛して行くのであるが、それでも落とし切れず、或いは
封ってゴタ／＼させる結果に終わった所があるかも知れない。

配列は大体年代順にした。ただ途中、約十頁「暗夜行路」に關係のある写真だけを集めてみた。此の作品
は作者の代表作で唯一の長篇で、此の中には当年の作者の生活が色濃く織り込まれており、千光寺や京都の
町々や大山や応挙寺や、作者の遊んだ土地が鮮かな描写で現れて来る。それらの写真をまとめて提供する事
は、「暗夜行路」の読者に興味深いだろうと思ったからである。写真の大竹氏は此所でも熱心さを發揮し
て、「暗夜行路」の「第三」の終りにある靈雲院という名の寺を、京都で半日ばかりで探し歩いて、妙心寺
の中で見つけて写して来てくれた。ところが作中の靈雲院は花園の法雲院という寺をモデルにして作者が勝
手につけた名前だという事があとで分かった。同名の寺が妙心寺の中に存在していたのは全く偶然で、
写真は無用になり大竹氏にこういふ思いをさせたのは、私の連絡不行居きからであった。しかし収めた写真
にはそんな不都合はない筈である。

阿川弘之

志賀直哉

日本文学
アルバム 13

定価200円

1955年7月25日初版発行

1959年7月25日4版発行

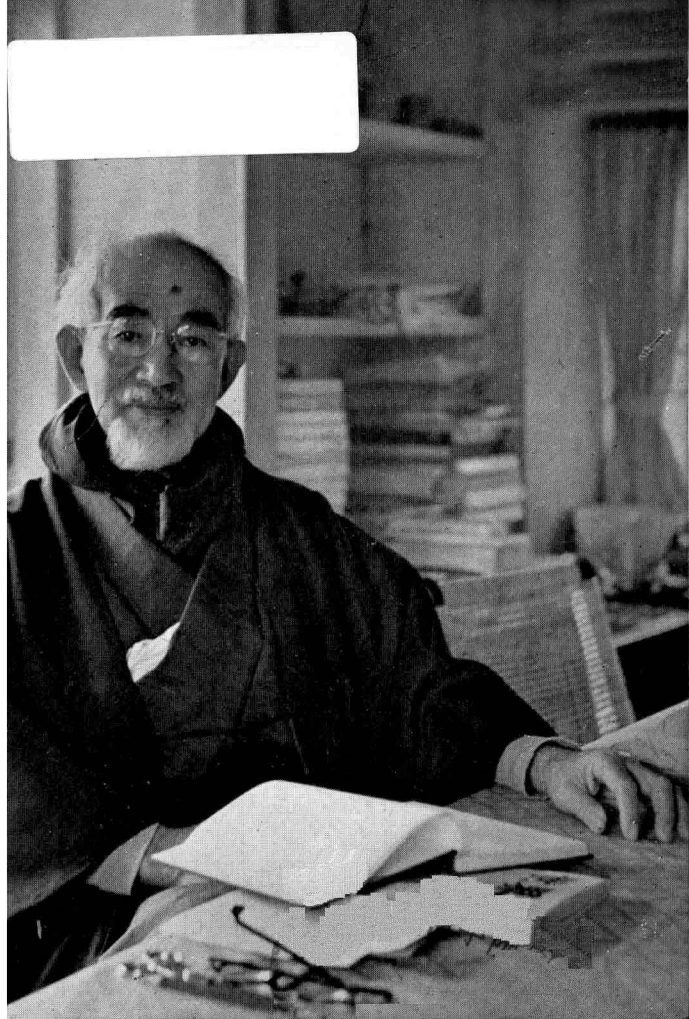
構成解説 阿川弘之
撮影 大竹新助

写真印刷 松本精喜堂
写真製版 佐藤製版所
写真植字 東京写真植字株式会社
別刷印刷 三晃印刷株式会社

株式会社
発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町
坂替 東京 165768

美行製本



昭和30年3月 73歳 熱海稲村にて

志賀重五

日本文学アルバム12

筑摩書房刊

向ひ島より観た尾道の夜景

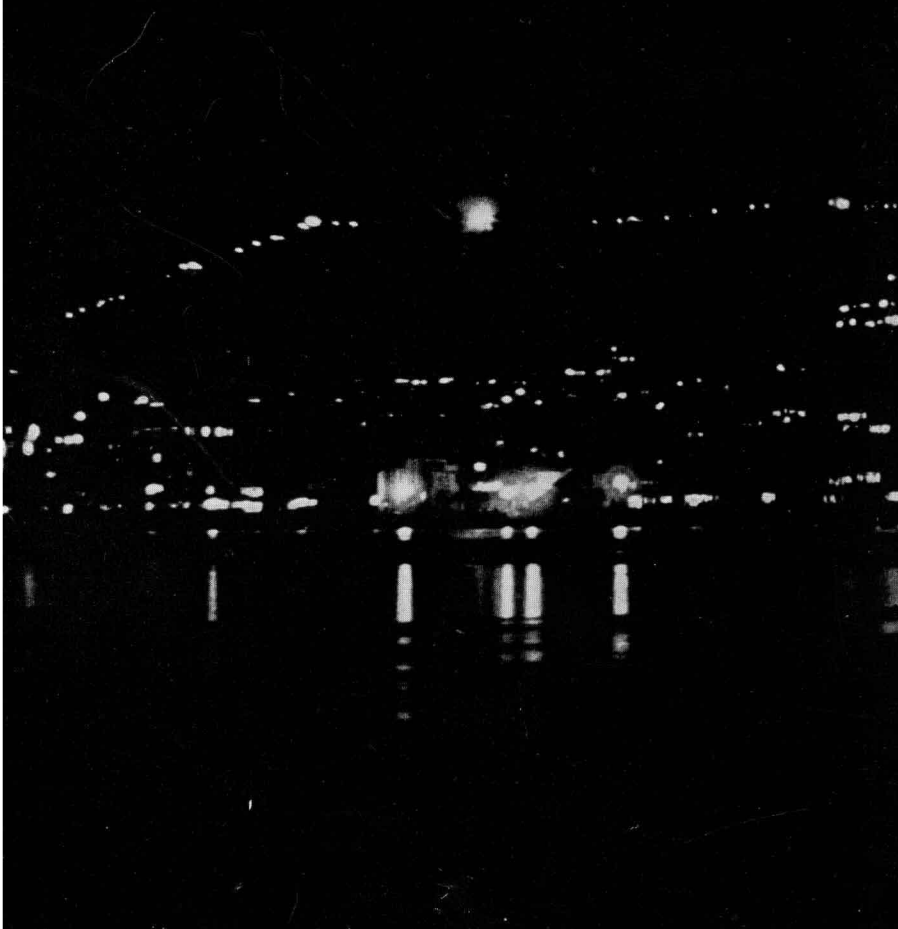
彼は起つて、障子を開けて
見た。未だ戸が閉めてなく、
内からさす電燈の明りが前の
忍返しを照らした。其彼方が
一寸した往来で直ぐ海だった。



海と云つても、前に大きな島があつて、河のやうに思はれた。何十隻といふ漁船や荷船が所々にもやつてゐる。そしてその赤黄色い灯の美しく水に映るのが、如何にも賑やかで、何となく東京の真夜中の町を想はせた。

十時になると多度津通ひの連絡船が汽笛をならしながら帰つて来る。舳の赤と緑の灯り、甲板の黄色く見える電燈、それらを美しい縄でも振るやうに水に映しながら進んで来る。もう市からは何の騒がしい音も聴えなくなつて、船頭達のする高話の聲が手に取るやうに彼の処まで聞えて来る。

——「暗夜行路」より——





現在の北上川と石巻市



石巻市の寺に残っている過去帳 志賀直温仲として兄直行の戒名が見える

あまり楽な方ではなかったらしい。其の生家は今は失われたが、石畳だけが七十年昔のままに残っている。



生母銀 明治十一年二月
一五年三カ月の時



石巻の生家跡

志賀家系

家

五三之個

華紋

輪二十四之字

旗紋

白地。赤土。二

志賀氏

志賀直馬

嶺南道志卷之四
山嶽

通志
賀縣志
守信州伊泰郡忠實城王

私若先年仕士屋

三

人言新市門

仕宦上與公齊謝元祐二年始得免官

直久

[illegible]

志賀家の系図

志賀氏が数え年三つになった時、氏の

父は第一銀行を辞して、此の年（明治十八年）、一家は石巻を去り、東京麴

町内幸町の氏の祖父母の家に移った。

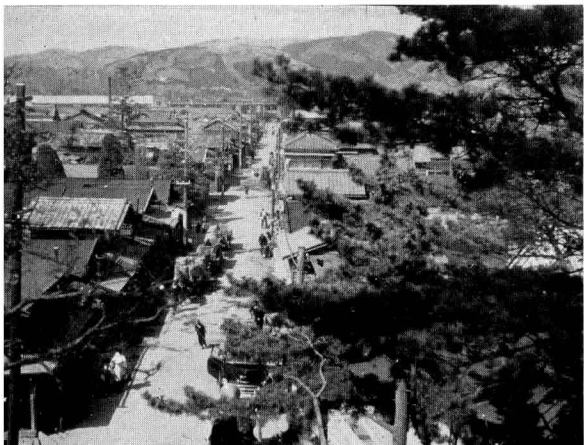
国志賀城主志賀直為という人の名から

始っており、直為は織田信長に城を追われて、のちに土屋公に仕えたという



事が見える。これらは古い事で必ずしも確かではないらしいが、此の直為の三代あとの志賀三左衛門直之という人が、上総国久留里の城主であつた土屋氏から相馬家へ養子に行つた長門守忠胤公の附家老として、久留里から相馬に移り、以来志賀家は代々相馬家に仕えたものようである。三左衛門直之の七代あつたが、志賀氏の作中によく名のある祖父直道である。

住吉神社より眺めた石巻





四谷尾張町の学舎校舎



明治20年7月 5歳



左より志賀直哉 森田明次 有島生馬 佐久間忠雄
写真の裏に「明治29年7月横須賀に遊の時之を写す」
とあり この写真の事は「触まれた友情」に出て来る



明治二十九年七月 一三歳五ヵ月

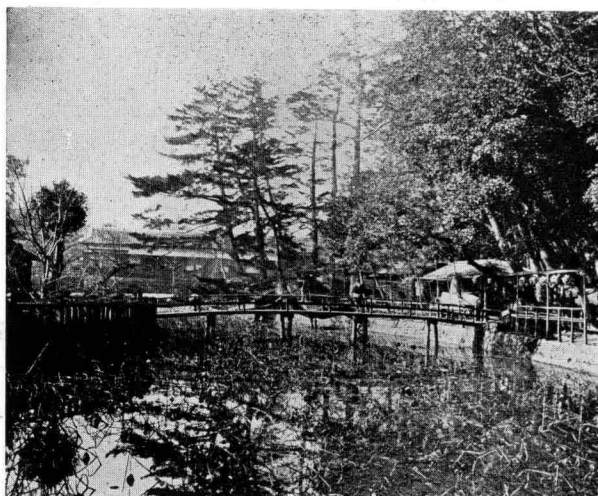
氏の祖父は、二宮尊徳の弟子で、明治になってからは一時福島県の大参事という役についていたが、その後疲弊した旧藩主の相馬の家を興すことを委嘱され、それを引き受けてからは生涯を其の仕事に打ち込み、相馬家の為に尽して、明治三十九年に八十で亡くなった。

志賀氏は此の世で自分が最もよき影響を受けた三人の人として、内村鑑三、武者小路実篤と共に祖父の名をあげており、此の祖父の事は、祖父が無実の罪で七十五日未決につながれた相馬事件のことに一緒に、近作の「祖父」という随筆の中に詳しく書かれている。氏は此の祖父直道と祖母留女とに深く愛されて、じいさんばあさん児の一人っ児で大きくなった。四つで芝幼稚園に入り、明治二十二年七歳で学習院の初等科に入学し、其の翌年、一家は芝公園の、もと増上寺の学寮であつた家に引越した。相馬事件が起つたのはそれから三年後の明治二十六年の七月で、母の銀が亡くなつたのは、氏が学習院の中等科に進んだ明治二十八年の八月であつた。

晩年の祖父直道



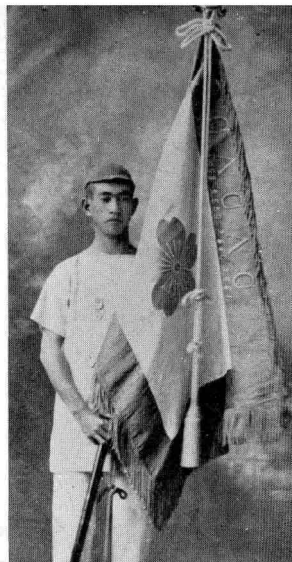
当時の芝公園 「触まれた友情」
に出て来る弁財天の池



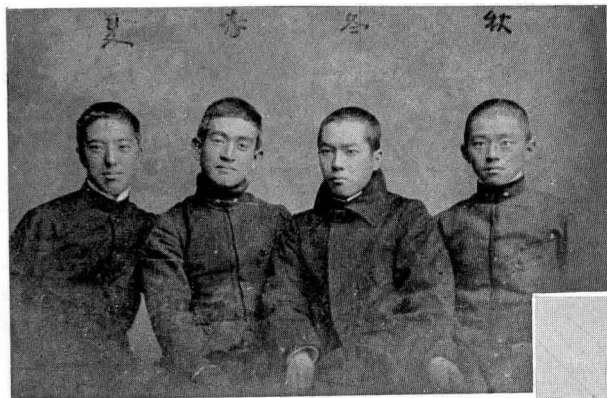
この二つは、少年時代の志賀氏が経験した最も悲しい出来事であつたようである。銀が亡くなって間もなく、直温は後添いの浩を迎え、それより明治四十五年までの間に、志賀氏には一人の異母弟と五人の異母妹とが出来た。



明治35-6年頃富士登山の記念写真 前列左から三人目黒木三次 中列左から二人目松平慶民 三人目前田利為 後列左から二人目志賀直哉



明治33年春ボートレースに優勝した時



左より松平春光 志賀直哉 有島生馬 田村寛貞（明治36年元旦）

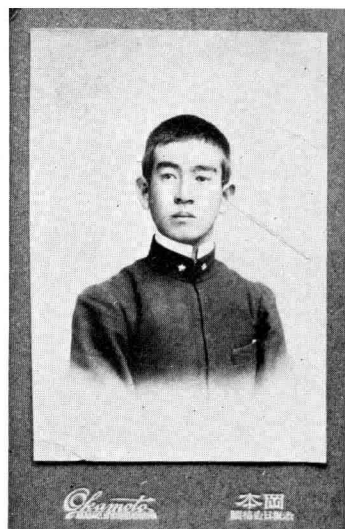
氏はそうして、ほぼ日清戦役から日露戦役への時期を、少年から青年へと成長して行つた。機械体操、ボート、自転車など、運動事なんでも得意であつたが、作文、英語、漢文、国語と、およそ文学に縁のありそうな学課はすべて苦手であつたと、氏は自分で書いてゐる。そして中等科在学中に二度落第した。

明治三十三年二月麻布三河台町の家の庭で





内村鑑三（中央）と其の家族



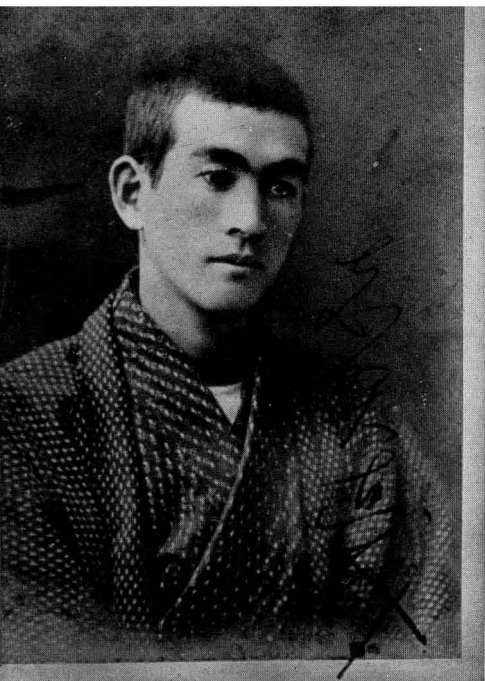
明治36年 2月 21歳

学習院の英語劇で 中央鳥打帽徳川慶
久 その左志賀直哉 右端細川護立



しかし二度目に落第した時、武者小路実篤と同級になり、これが氏の文学をやる上に大きな意味を持った事は周知の通りである。そのクラスには又、ほかに木下利玄があり、正親町公和がおり、細川護立がいた。それより前、明治三十三年十八歳の時、氏は家の書生をしていた末永馨という青年につれられて、内村鑑三を訪ね、それから七年間其の許にかよってキリスト教に接したのであるが、此の事も氏の人生と仕事の上に忘れてならない意味を持っている。

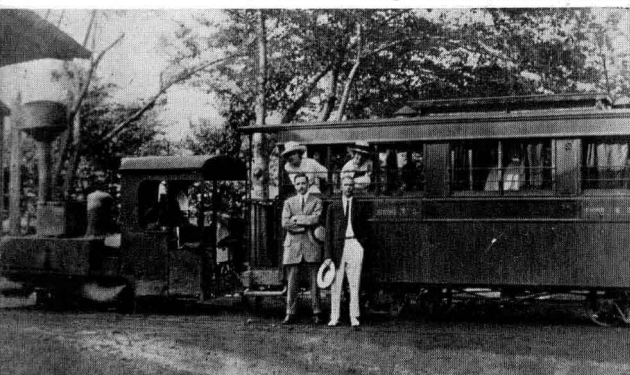
一方父直温は次第に明治の実業界に地歩を築き、家産を興して、明治三十年に、一家は麻布三河台町の大きな邸に移っていた。



祖父直道の手紙



「子供四題」や「真鶴」に出て来る熱海行の軽便鉄道



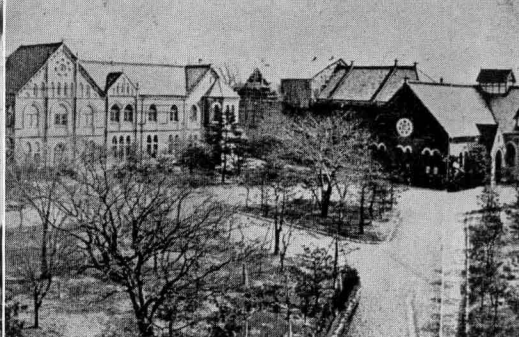
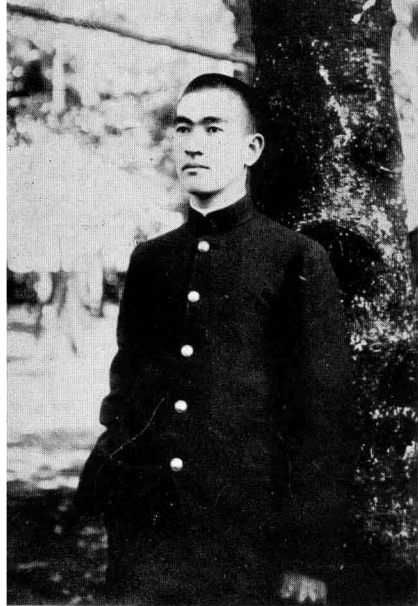
右 上

昭和二九年中央公論社版「志賀直哉文庫」の
石井鶴三章「菜の花と小娘」挿画

左 上

明治三九年一〇月類似赤痢を患いその病上りの
「一月撮影」「大津順吉」に書かれている時代

氏は少年の頃には海軍士官になるつもりでいた。その後は又、実業方面で大金持になろうと思ったり、或る時は伝道者になろうとも考えたりした。生涯の仕事として文学を志すようになったのは、明治三十六年二十一歳で学習院の高等科に進んでしばらくしてからのことである。そして明治三十七年の五月には、処女作の一つとされている「菜の花と小娘」が出来た。



明治末年の東京帝国大学 右は 図書館 左は法文学部の建物

明治四〇年 魏町細川邸にて

しかし其の頃から氏と父直温との仲は段々不和になって行つた。それには氏がじいさんばあさん児で、仕事の関係で東京の家を離れ勝ちだった父親とは、次第に齢のちがう兄弟のような間柄になって行つた事、人生や仕事に対する考え方のひらき、父と子と双方の一本道な性格等、色々の原因を挙げる事が出来る。「山形」や「大津順吉」や「和解」などの作に、それはよく書かれている。明治三十九年東京帝国大学の英文学科に入学した翌年、家の女中と結婚しようとしたことから、その争いは一つの頂点に達した。そしてこの年氏は内村鑑三の許を去つた。

下の写真上 明治38年有島生馬外遊の前の睦友会(学習院初等科からのクラス会) 前列中央有島生馬左端田村寛貞 後列左から二人目黒木三次 右へ志賀直哉 柳谷午郎

下 明治43年有島生馬帰朝後の睦友会 左より黒木杉山得一 米津政賢 志賀 有島 柳谷



「山形」に出て来る鳴子温泉の風景

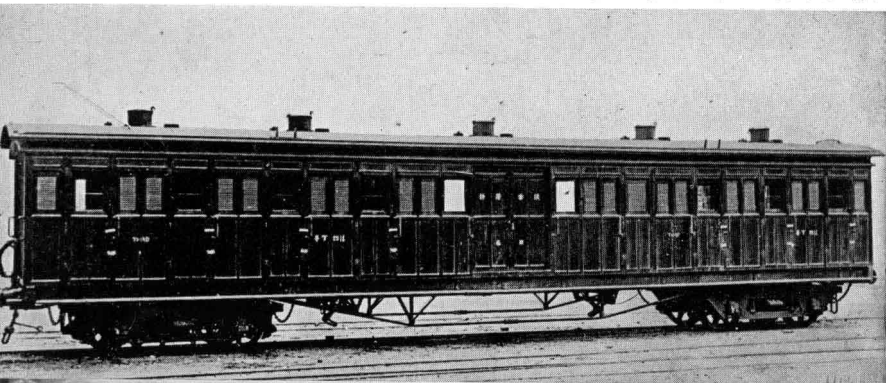




明治41年頃 『望野』同人 左より武者小路 正親町 木下 志賀

東大では氏は英文科からのちに国文科に転科したが、間もなく明治四十一年に中途退学してしまった。徴兵の関係から明治四十三年迄籍は置いていたが、実際には大学をよし、そして此の年から漸く次々と活潑に小説の執筆をし始めた。「或る朝」「網走まで」「速夫の妹」「荒絹」等はいずれも此の年に書かれたものである。武者小路実篤、正親町公和、木下利玄と四人の同人で『望野』という廻覧雑誌が始められ、これらの諸作は、皆『望野』に綴じられて仲間うちで見せ合い批評し合ったものと思われる。此の『望野』が基礎になって、それに同じような学習院の下級の仲間の廻覧雑誌『麦』や『桃園』の同人たち、児島喜久雄、里見弴、柳宗悦、郡虎彦等に、有島武郎、有島生馬も加って、明治四十三年四月、のちに日本の近代文学史の上に

「網走まで」に出て来る明治末年頃の客車

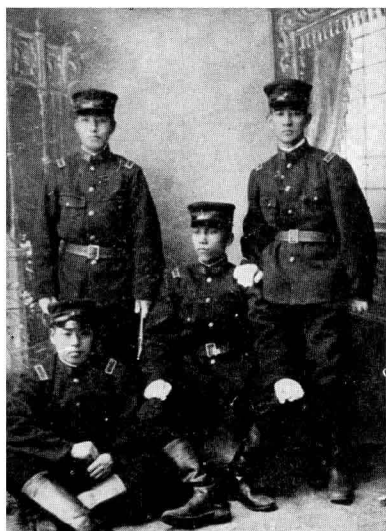




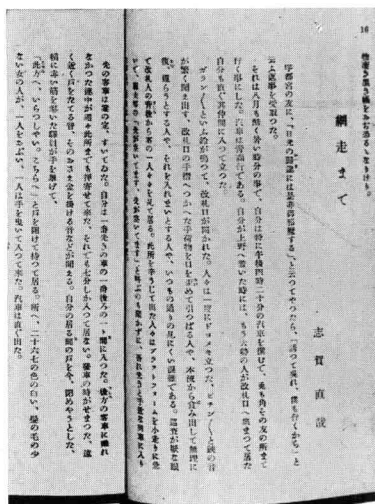
『白樺』創刊号表紙



明治43年12月 鴻ノ台の聯隊より
外出両国にて写す 右端志賀直哉

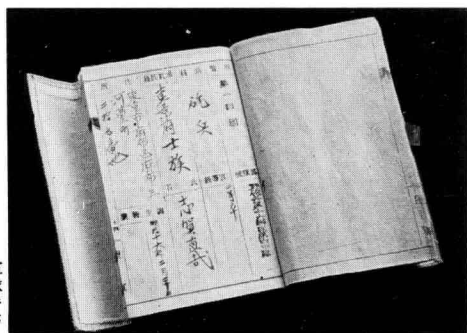


軍隊手帖



『白樺』創刊号に載った「網走まで」

大きな位置を占める『白樺』が創刊された。「網走まで」は『白樺』の創刊号に掲載されて、氏が世間に発表した最初の作品となった。この年、氏は徴兵検査を受け、甲種合格で十二月一日千葉県市川鴻台の砲兵第十六聯隊に入営したが、伝手を求め、九日間で常後備役免除となつて家に帰った。「濁った頭」や「剃刀」はこの年の作品である。





「鵠沼行」に出て来る鵠沼の東屋（左端二階家）

明治44年1月15日 左より田中治之助
志賀直哉 里見淳 武者小路実篤

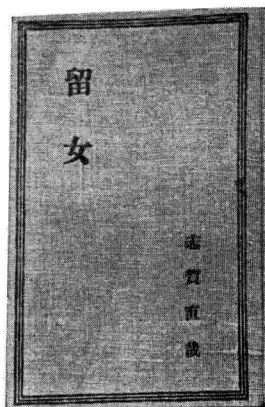
『白樺』の同人たちの意気は軒昂たるものがあつた。華族の坊ちゃん達の遊び半分の仕事と一部に目されていた雑誌は、しつかりした発展を遂げて行つた。「速夫の妹」も「鳥尾の病氣」も「彼と六つ上の女」も「老人」も「襖」も「濁った頭」も、此の時期の氏の仕事の大部分は『白樺』に発表された。



明治44年11月長与善郎宛の絵葉書

明治45年『白樺』同人 前列右より有島生馬 三浦直介 園池公致 柳宗悦 里見淳 志賀直哉 田中雨村
後列右より日下諒 長与善郎 正親町公和 木下利玄 高村光太郎 小泉鉄 武者小路実篤





初めての単行本『留女』

祖母留女



大津順吉

著 賀直哉

『中央公論』大正元年9月号所載の「大津順吉」

氏の作品で商業雑誌に出たのは大正元年の「大津順吉」が最初である。氏は此の自伝的な小説で初めて百五枚百円の原稿料を貰った。その頃しかし、生れて三年目を迎えようとする『白樺』には、漸く所謂人道主義的な匂いが濃くなり始めていた。氏は性格的にも、一つの旗印をかけた運動にはついて行けない方で、段々居心地が悪くなり、——そしてそれ以上に大きな原因は父との不和であったが大正元年の秋に、三河台町の家を出て、単身広島県の尾道に赴きそこで長い小説を手がけ乍ら自炊生活を始めた。此の生活は僅か一年足らずしか続かなかったが、後に書くように「暗夜行路」の制作の上には重要な意味を持った。翌大正二年の一月には『白樺』を出していた洛陽堂から最初の短篇集が出版された。本の題名は祖母の名を取って『留女』と名づけられ、祖母に捧げられた。

千光寺の上から見た尾道市と向い島

